

H・ジェイムズ文学における道徳と プラグマティズム的要素 — (1)

阿出川 祐 子

Morality and Pragmatism in the Works of H. James — (1)

Yuko Adegawa

ジェイムズ文学において道徳の問題は、審美観に関する問題と並んで重要な鍵である。彼の「小説の芸術 (“The Art of Fiction”)」を始め、「フローベル論 (“Gustave Flaubert”)」 「ダヌンツィオ論 (“Gabriele D’Annunzio”)」あるいは、ニューヨーク版の「序」等には、道徳に対する並々ならぬ好奇心と強い信念が披瀝されている。ジェイムズの目指す作品とは作り手の知的精神を反映するものであり、道徳感覚と芸術的感覚が一致するものだという事が至るところで繰り返して主張されている。¹ 彼はドフトエフスキーやホーソンの様に、道徳をキリスト教の霊的精神に関連付けて描く作家ではなかった。(Matthiessen, *Major Phase* 164) また、宗教的な主題や宗教的雰囲気の中で、道徳を説くという事をめったにしない作家であった。(Putt 363) むしろ社会における習慣、口に出して言われぬルール、人々が期待する行動といった、いわゆる社会の *more* の中で、道徳を描き出す作家であった。(Pippin 5)

彼の小説論に限らず、小説においても、道徳 (moral / morality) という言葉は多く表され、特にそれは異文化対立の描写の局面で異彩を放つ。例えば『黄金の盃 (*The Golden Bowl*)』の最初の部分で、アメリーゴは自分たちローマ人の道徳感覚をイタリアの古い城の中にある石の階段に例え、英米人の道徳感覚を15階建ての近代的な建物内にある「稲妻のように速いエレベーター」と表現する。(31) 石の階段は、曲がりくねって、半分壊れかかっている明かりもおぼつかないものと描写され、一方、近代的エレベーターは蒸気で動き、ロケットのように人を上に送ると書かれる。この描写に先立つ会話の中でアメリーゴは、「自分はいつも道徳的な道から外れて間違いをしでかすかのではとビクビクしている」とアシンガム夫人に打ち明け、「あなた方イギリス人は、生まれつき備わっている第六感ともいべき道徳感覚を持っているが、自分達イタリア人にはそれが無い」と言う。(30) また、この引用文の直後の場面では、「イギリス人のお茶は、彼らの道徳であり、それを飲めば飲む程イギリス人は道徳的になる」とも言う。(32)

このような文化的、歴史的相違を背景に人物たちの考えや行動、あるいはその葛藤を描きだすのがジェイムズ文学における典型的な異文化対立描写の特徴であることはすでに良く知られている。

そして、この様な異文化対立は多くの場合、異文化における人物たちの道德観の対立であった。

しかし、本章においては、異文化対立の要素としての道德観という問題をいったん論議の中心から外して脇へ置き、このアメリーゴの道德の相違の例えを全く別の観点から見ることを筆者は提案するものである。即ち、アメリーゴの道德の例えは、この小説に描かれた時代の、道德に関する「哲学」の様相を象徴していると見る考え方である。つまり、この例えは、イタリア人の考え方や風俗、あるいはイギリス人の行動様式や風習を文化として広い意味で象徴化しているという面を持つと同時に、もうひとつの面——即ち、この時代に様々に論議され、実行され、再び論争された道德そのものを象徴している——を持つという考え方である。ローマの石の階段のような道德もあれば、蒸気で動くエレベーターに例えられる道德もある。また、この後、アシンガム夫人が示唆するようにこの二つの種類の道德の他に、第三、あるいはそれ以上の種類も存在するのである。このように道德を風習の結果や生まれつきのものと見ることに加え、これを手段、あるいは設備に例えているところはいかにもプラグマティズム (Pragmatism) の哲学者を兄に持つジェームズらしい発想と言えよう。

このような道德の例えの他に、ジェームズ小説における道德の扱いはその表層面から見ただけでも、様々な表情を見せる。例えば自己の道德観を省み、その置かれた状況や立場に思いを及ぼし、「自分達だけが利己的で安楽な生活を楽しむことは不道德ではないか」と思い悩む人物の姿も描かれ、聖書に表された倫理観に近い道德観も見られるのである。

ジェームズがキリスト教信者でなかったことは良く知られているが、ジェームズの小説には、聖書の教えや、キリスト教の聖句を連想させる主題も多い。ここで筆者は、このような現象を一応、「ジェームズの、キリスト教文化の中で育った所産」と規定しておく。²『黄金の盃』におけるこのタイトルの表す語意と「伝道の書 (Ecclesiastes)」の聖句の一致、あるいは「黄金の杯 (a gold cup)」の語意と聖句に出てくる「不義」の意の符号、あるいは、『鳩の翼 (The Wings of the Dove)』のミリーの最終的行為とキリスト教の説く「愛の意義」、『使者たち (The Ambassadors)』のマリー・ド・ヴィオネが最後に見せるチャドへの自己犠牲とも、雅量とも解される寛容な態度等、ジェームズ小説の中にキリスト教的知識あるいはキリスト教から見て是とされる価値観を表す場面は、かなり多く表れるのである。

ジェームズがキリスト教に対する信仰を持たなかった事は、キリスト教文化の環境で育った結果の逆説的な出来事ともいえるのであり、この事情はよく知られている。³ 彼の二つの「自伝」によく示されている様に、ジェームズの育ったアメリカ東部中産階級的环境は、ほとんどキリスト教以外の倫理的、道德的教育が入る余地のないほど、キリスト教文化に浸されたものであったことは周知のところである。彼の自伝『少年と他の人々 (A Small Boy and Others)』には、『ヨーロッパ人 (The Europeans)』に出てくる勤勉実直な、ピューリタンであるウェントワースト氏にほとんど生き写しと思われる親戚の叔父伯母たちの姿が描き出され、また、「エマソン論 ('Emerson)』には、この哲学者にして詩人に代表される時代が「道德の観点から見て光り輝いた

時代」であった(69-70)と、敬虔の念を込めて表現され、その純粋な精神性を称える態度が率直に表される。そして、「エマスの様な良心は、何世代にも渡るたゆまぬ努力と洗練の上に生まれてくる」(70)という確信が披露され、その道徳的生活を営む能力が強調されている。

言い換えれば、ジェームズは、一方では、自分がエマスと同時代の人間になり得ぬことを知り、自分がエマスと同じ仕方で神を信仰していないその事実を自覚する文学者でもあったのだ。それでは、ジェームズの道徳観を成立させている要素とは何であったのか、エマスを絶対的敬愛の念を持って、天才と認めつつ、しかし、エマスとは違う時代に生を受け、彼自身の時代固有の経験を、好むと好まざるに関わらず体験する運命をもったジェームズの道徳観はどのようなものであったか、これを探ることが本章における主な目的である。

先に述べた様に、ジェームズの幼・青年時代を育んだ、アメリカ東部中産階級の道徳観は、ジェームズの道徳観形成に有形、無形にかなりの影響を及ぼしていると筆者は見ている。しかし、それと同時にジェームズの道徳が、そこから発展した哲学、つまり、彼の兄ウィリアム・ジェームズ(William James)の創始したプラグマティズムと大いに関係があったという観点に立つものである。本章においては、H・ジェームズの道徳観と、彼の兄の哲学であるプラグマティズムとの関連を中心に論をすすめようとするものである。

そもそもこのプラグマティズムの歴史は1870年代のアメリカ東部で、少壮の研究者6人が始めた「形而上学クラブ」という集まりに濫觴を持つ。この集まりは、チャールズ・パース(Charles S. Peirce)やウィリアム・ジェームズらが中心となり、マサチューセッツ・ケンブリッジで発足させたものである。それより半世紀前にエマスらによって、この町から大して離れていないコンコードで超絶論派の集まりが開かれたのは、歴史の偶然というより必然であり、揺籃期のプラグマティズムが、エマス、ソロー、オルコット等の個人主義的人生観から強い影響を受けていたのは当然のことであった。その意味でプラグマティズム哲学とH・ジェームズを育てた環境はその根本をほぼ同じものとするのである。プラグマティズムが清教徒文化の中心地において、清教徒の道徳的伝統を背景に誕生し、清教徒の子孫によって育てられたことは、H・ジェームズの作品を見る上で重要な要素なのである。

また、これと同時に、H・ジェームズと兄ウィリアムの生まれ育った時代が、エマスより1世代後であるという事実は、産業革命後の歴史的激動期における、社会体制の変革と、いわゆる「近代化」⁴により、「個人の意識」、「自我の目覚め」が、心理学と関連して大きくクローズアップされた時代である事を意味する。H・ジェームズが、時代を反映した彼独特の文学を生み出したことは、歴史的必然性を伴った結果なのであり、これが彼の道徳観と大いに関係することは言うまでもない。⁵

H・ジェームズとプラグマティズムの関係については既に、注目すべき先行研究が存在するが、まずこれに関する論議の中で、幾つかの主要な論点を取り上げ、その内容を確認してみよう。その論点の第一のものはH・ジェームズと兄ウィリアムズの兄弟愛に関する関係であり、第二のも

のは H・ジェームズ文学研究史において常に問題になってきた「意識」と「道徳」の関係である。第三のものは、兄の『プラグマティズム (Pragmatism)』が刊行された時、H・ジェームズがこの本を絶賛し、「自分は、すでに長い間無意識のうちに、プラグマティズムの考え方を、まるでジョルダン氏の様に、自己の中に会得していることに気づいた」⁶ と述べた事をどう解釈するかの問題である。これは言い換えれば、H・ジェームズの作品に、プラグマティズム的要素が認められるか否かという問題でもあるのだ。これら三点は、互いに入り組んだ問題で、時にオーバーラップする部分もあるが、便宜上、三つの項目に区分して考えてみよう。

まずこの二人の兄弟愛に関して、二つの大きな見方が存在した。つまり、伝記作家レオン・エデルによるこの兄弟の性格に関する詳細な叙述と、アメリカ学術学会会員登録の際のウィリアムの発言を示す有名な手紙とを根拠に「この兄弟の性格は正反対であり、二人は互いに反発し、双方の主張を自分に取り入れることはなかった」とする見方がそのひとつである。⁷ これに対して、エデルの叙述、及び手紙の公表は、二人の兄弟がかえって深く理解し合っていた証拠であり、問題の手紙に対するエデルの解釈は、ウィリアムのユーモアを解さない誤りであると見なす考え方が対立した。現在では、後者を是とする者が圧倒的に多いと見受けられる。⁸ 筆者も、エデルの伝記と書簡編集が、ジェームズ研究に多大な功績を挙げている事を疑うものではないが、しかし、ジェームズ兄弟の関係は深い愛情で結ばれている事を認めるものである。⁹

第二点の問題であるジェームズの「意識」と「道徳」に関する研究は、J.W.ビーチ (J. W. Beach) によるジェームズの内的生活と倫理問題を扱った『ヘンリー・ジェームズの技法 (The Method of Henry James)』、パーシー・ラボック (Percy Lubbock) の、作者の視点と意識の問題を扱った『ヘンリー・ジェームズの技術 (The Craft of Fiction)』、F. O. マシーセンの「意識の宗教」についての論議、レオン・エデルの心理学的写実主義を論じたもの等、数多く存在し、そのほとんどがジェームズの道徳観の基礎に「認識論」があることを認めたものである。これはH・ジェームズが、近代という歴史的時代の流れの中でキリスト教から解き放たれ、「自我の意識」が台頭した「時代の子」であるという必然性と結びつくものであり、ほぼ同時代のウィリアムが心理学者として意識の問題を扱ったことと同じく、この時代を反映した文学及び心理学を含む科学の発展結果として、自然の帰結ともいえるべき現象であった。しかし、ここで問題になるのは、これがプラグマティズムの道徳観に連なっているか否かであり、これは第三点の論点と接触するものである。

次に第三点に移るが、ここで注目すべきは、H・ジェームズの道徳と意識の関係を扱った多くの批評家たちが、H・ジェームズ文学を兄のプラグマティズムの哲学と結びつけることをほとんどしなかったことである。先に見たエデルが、二人の個人的影響関係を重視しなかった様に、また後に言及するマシーセンや R. B. ペリー (Ralph B. Perry) あるいは、ドロシア・クルック (Dorothea Krook) が必ずしも兄のプラグマティズムのH・ジェームズへの影響を認めていないように、多くの優れた批評家の中にもこの関係を認めない者も多かった。¹⁰

一方、H・ジェームズの作品に、プラグマティズムの存在を認める批評家の代表は、リチャード・ホックス (Richard A. Hocks) である。彼は特にF. O.マシーセンとR. B. ペリー、そしてエリシオ・ヴィヴァス (Eliseo Vivas) によるH・ジェームズとプラグマティズムに関する論点を鋭く指摘することにより、ジェームズが、「知らず知らずのうちに兄のプラグマティックな考え方を自分のものとしていた」と述べた言葉の重要性を捉え、プラグマティズムとジェームズ文学の関連性を精密に分析し、具体例を多く示し、説得力のある論を展開した。¹¹ これは、マシーセン以降のジェームズ批評として高く評価されるべき多くの論点をもつものであると思われる。

F. O.マシーセンが「意識の宗教」の中で、H・ジェームズのプラグマティスト宣言に関して、「兄の著作を夢中になって読み続け、ジョルダン氏のように知らず知らず生涯のうちに、プラグマティズムを実践していたことを知ってすっかり感激していますなどと書いているが、彼には体系的な思想と呼ぶべきものは、その痕跡さえほとんどない。彼は行動人でも思想家でもなく傍観者であって、その本領は最もきらびやかな場面を構成し、額縁の中に納める仕事にあったのである。しかし、彼は脆い表面の下に常に潜む深淵の意識を生涯保持し、父や兄に劣らない不朽の名作を世に残した」(143) と書いたことはよく知られている。マシーセンはこの兄弟が愛情深く互いに尊敬し合う間柄であり、二人の間に「意識」に関する共通理解が存在した事は認めたが、ヘンリーがプラグマティズムをその文学中に、内包していることについては明確に否定していた。彼は、「意識の宗教」の中で、H・ジェームズが、人物の過去の意識と、過去を意識する自身の姿を描くことに注目した。そして、未来、あるいは意識の次の状態を、いつも見つめている人物についてのジェームズの描写を取り上げ、詳細に批評している。これは、プラグマティズムの観点から見れば、いわゆる意識の「連続性」についての一部を示すものであるが、マシーセンはそれをプラグマティズムとして見ることはしなかった。マシーセンが捉えた事実をプラグマティズムと呼ぼうと呼ぶまいと、それ自体は重要な問題ではない。ホックスのマシーセン批判の中心論点もそれではない。プラグマティズムという哲学は、W・ジェームズ自身、「ある古い考えをあらわす新しい名前」(*A New Name for Some old Ways of Thinking*) という説明的副題をその著『プラグマティズム』につけているように、昔からあった様々な哲学を取り入れたものであり、その役割とは、これなくしてはいつ果てるとも知れないであろう形而上学上の論争を解釈するひとつの方法なのであり、しかも、これは様々な意味で柔軟性に富む哲学なのである。¹² 従ってマシーセンが、これをプラグマティズムと呼ぶか呼ばないかが論点の中心でないのは明らかであった。ホックスが主張するのは、H・ジェームズの道徳観の捉え方に、マシーセンの誤りが認められるというものである。ここで我々はその誤りの内容を確認するために、これに関連して、ホックスが比較資料として出しているエリシオ・ヴィヴァスの「ヘンリーとウィリアム (Henry and William)」という、1943年にケニヨン誌 (*Kenyon Review* 5) に載った論文をまず吟味せねばならないであろう。

ホックスによると、マシーセンの「意識の宗教」が発表された当時、マシーセンと、もう一人

の、この「関係論」の否定者、R. B.ペリー が、当時、巨匠的位置を占めていたために、彼らの強い意見の反映で、多くの研究家がH・ジェームズのプラグマティックな面を見落としただのと言う。(29) ホックスはヴィヴァスのケニヨン誌に載った論文が、あまりにも目立たなかった故にその重要性が見逃されたのも、この関係の観点に影響を与えていることを示唆しつつ、この論文の重要性を喚起している。ホックスは、まずこの兄弟間に複雑な精神的親近性があったとヴィヴァスが考える点では、マシーセンと同じ立場である事を確認し、その上で次に見るようなヴィヴァスの二つの要点を明確にし、その問題点を指摘している。

つまり、ヴィヴァスの一つめの主張は、ヘンリーとウィリアムの道徳観が対立していたと見るものであり、二つめの主張は、ヘンリーとウィリアムズの認識論の概念には類似が認められるというものである。(31)

ヴィヴァスは「ヘンリーとウィリアム」の中で、この二人の兄弟間の道徳観の対立について、兄ウィリアムの思想を「便宜主義の道徳 (morality of expedience)」、あるいは「薄められたダーウィン主義 (attenuated Darwinism)」と呼び、これは、ヘンリーの一生を通じて保持した熟慮、理想主義、美の原理とは、対照的なものとみなした。言い換えれば、ヘンリーは兄の世界観である anti-intellectualism を否認し、「思索」に対する「生活」、「理論」に対する「実人生」、「沈黙」に対する「行動」を強調した兄と対照的であるとヴィヴァスは見たのであり、その根拠として『聖なる泉 (The Sacred Fount)』に出てくるH・ジェームズの表現「真にわくわくさせることとは、知的な冒険に他ならない。ある人にとって少なくとも熟慮それ自体が生き方の中で最も激しいものである」を引用した。(Vivas 582) 更に二人の道徳観の相違を示すもうひとつの例として、『ポイントンの蒐集品 (The Spoils of Poynton)』を取り上げ、フリーダ・ヴェッチがH・ジェームズの倫理的観点を示し、都合のために結婚する便宜主義を排し、より高等な生き方の原理を描きだそうとしていると主張した。(Vivas 586)

一方、二人の兄弟間に見られる認識論の類似に関して、ヴィヴァスは、ウィリアムの「意識」と、「純粋なる経験」についての概念が、ヘンリーの小説中の人物の意識と行動に類似していると捉えた。ホックスから見ると、この兄の「意識の流れ」と「純粋経験」の理論は、19世紀後半のヨーロッパ社会思潮の本質的特徴であって、これは、プラグマティズムやH・ジェームズの小説のみに表れるものではなく、ベルグソンやその他の哲学、あるいは絵画の分野では、印象主義派にもみられ、またウィリアムの内省における分析にもよく見られるもので、ヴィヴァスが特に二人の関係に限定することに疑問をもつ。そして何よりも、ヴィヴァスに関してホックスが重視した事は、ヴィヴァスが、二人の兄弟にみられる道徳概念と認識論を分けて考えたことである。ホックスは continuity (物事の連続性) というプラグマティズムに特徴的な概念を認める限り、ジェームズ兄弟の道徳的概念と認識論的分ける考え方は誤りであると主張した。ウィリアムの哲学であるプラグマティズムにあっても、ジェームズに表される作品にあっても、道徳的概念と認識論的概念は、相互に依存し、深く関連し合うもので、これを切り離して考えることは不可能で

あるというのが、ホックスの考えであった。

また、ヴィヴァスが、ウィリアムの鳥の飛行 ('flights') と停止 ('perchings') にたとえられる、意識の概念について、ヘンリーの小説にあてはめて説明したことについても、ヴィヴァスが二人の関係にプラグマティズムを導入して考察した事実を評価しつつ、しかし、これが十分に論理をつくしていないという点で批判的であった。¹³

ホックスはH・ジェームズのプラグマティックな面を肯定するヴィヴァスを詳しく吟味することによって、この面を否定するマシーセンの論点を明らかにしようとしている。即ち、ホックスは、マシーセンが「意識の宗教」で述べたジェームズ兄弟の対立点を取り上げ、ヴィヴァスとマシーセンは意識と道徳の取り扱いを分けたという点で類似していると指摘する。マシーセンが「兄は行動家としての認識者であるのに対し、弟は傍観者としての認識者」だと述べ、更に「この二人の兄弟の道徳的立場はほとんど同じである」という観点を示したことについて、ホックスはヴィヴァスにするのと同様に、「ウィリアムとヘンリーの道徳と認識の論理を切り離すことは誤りである」という批判をした。(36) つまり、マシーセンとヴィヴァスは共にH・ジェームズの「道徳」と「認識」について、部分的に正しく捉えながらも、プラグマティズムの根本思想である、「道徳」と「意識」と「行動」は、切り離せないものだという、いわゆるプラグマティズムにおける「意思の役割」に関する理解が欠けている点を指摘したのである。このようにして、ホックスはヴィヴァスとマシーセンが同じ誤りを犯している事を明確にし、そこにプラグマティズムの本質が関係している事をも示し、これをH・ジェームズ文学がウィリアムの哲学を映し出しているとする論述の出発点とした。

そして、上に述べた事を示す実証例として、次にみるような文を取り上げている。ホックスはこの部分に最も典型的にプラグマティズムの特徴が表れていると考えたのである。これは少し長いですが、多くの研究者によって言及される重要な箇所であるので、あえてスペースをとることとする。

My Dear Henry [Adams], I have your melancholy outpouring of the 7th, and I know not how better to acknowledge it than by the full recognition of its unmitigated blackness. *Of course* we are lone survivors, of course the past that was our lives is at the bottom of an abyss — if the abyss *has* any bottom; of course, too, there's no use talking unless one particularly *wants* to. But the purpose, almost, of my printed divagations was to show you that one *can*, strange to say, still want to — or at least can behave as if one did. Behold me therefore so behaving — and apparently capable of continuing to do so. I still find my consciousness interesting — under *cultivation* of the interest. Cultivate it *with* me, dear Henry — that's what I hoped to make you do — to cultivate yours for all that it has in common with mine. *Why* mine yields an interest I don't know that I can tell you, but I don't challenge or quarrel with it — I

encourage it with a ghastly grin. You see I still, in the presence of life (or of what you deny to be such,) have reactions — as many as possible — and the book I sent you is a proof of them. It's, I suppose, because I am that queer monster, the artist, an obstinate finality, an inexhaustible sensibility. Hence the reactions — appearances, memories, many things, go on playing upon it with consequences that I note and “enjoy” (grim word!) noting. It all takes doing — and I *do*. I believe I shall do yet again — it is still an act of life. But you perform them still yourself — and I don't know what keeps me from calling your letter a charming one! There we are, and it's a blessing that you understand — I admit indeed alone — your all-faithful [Signed] Henry James.¹⁴

この手紙は、H・ジェームズが過ごした少年時代の記録を家族や友人の思い出と共に自伝にまとめて刊行し、そのことについて幼少年時代からの友人ヘンリー・アダムズに手紙で知らせたところ、アダムズから返事が届いたという事情のもとに書かれたものである。¹⁵

ホックスは、この手紙の特徴として、まず、ジェームズ後期の典型的な文体がみられるという。ダッシュやアンダーライン等入念な統語的文体の特徴が、そのひとつであるが、それ以上に注目されるのは、H・ジェームズ後期の文体総体が、様々な解釈を引き起こした様に、ここにおける言い回しが多様な解釈を可能にすることだという。例えば最初の「この軽減されることのない暗さ」に対する全くの認知 (recognition) という言葉や、「あなたの憂うつな胸中を吐露する文面 (melancholy out pouring)」といった言い回しに、アダムズに対するH・ジェームズの同情を見る者もいれば、皮肉を見る者もいるだろうし、保護者的な態度を見る者がいることも十分考えられるという。ここでホックスは、この 'recognize'、という言葉に精査し、これは see (解る)とも agree (同意する)とも取れるが、H・ジェームズはこの暗さ (blackness) に関し、軽減されないことを see (解る)のかどうかを問題にしている。(Hoks 55) これこそは、ホックスが問題にする、プラグマティズム哲学との係わりなのであり、人間のおかれていた現状と未来に対する態度に関する重要点なのである。

ホックスはこの「解る」という言葉の中にプラグマティズムの特徴のひとつであるいわゆる柔軟な考え、あるいは規定されない考え (unstiffening) を見ているのである。つまり、H・ジェームズが、二人の置かれた共通の状況に対して、アダムズと自己の態度が異なっている事実を強く認識した上で、なお相手にどのような態度を取ったかを問題にしているのである。アダムズがジェームズの自伝発刊について持っている感情は、「過去は過去であり、過去の思い出を現在と混同することに意味がない」というものであった。アダムズは現在の暗たんたる世相を嘆き、特に話したいのでない限り、深淵の底にある過去について語るのは、無駄だと言っているものであり、それに対し、H・ジェームズはアダムズの言い分も正しいと認め、しかし、この考え方から一步未来へ踏み出すことを相手に提案する柔軟な考え方を示している。この柔軟な考え方というものは、

ウィリアムが至るところで繰り返し強調しているものであるが、物に対する見方として、固定した価値や意味を限定することを避ける考え方である。¹⁶ ホックスは、この手紙にもそれが表れているとするのだが、H・ジェームズが、本来、伝統的固定化に対峙する柔軟な考え方を持っていたことはよく見られることであり、その代表例が「小説の芸術」なのである。この小説論は、ウォルター・ペザントの「小説はこうあるべき」との規定的態度に反駁するために書かれたという事情と、その内容が小説芸術に対するH・ジェームズの柔軟な観点の発表である事はよく知られているところである。ホックスはここで、H・ジェームズ後期の表現の中に、「概念は経験として表されたところにおいてのみ意味があるのであり、ある固定した規定の上に立てられるものではない」という考えがある点に特に注目し、その考え方とアダムズに宛てた手紙にみられるプラグマティックな意味を結び付けようとしているのである。¹⁷ このようなホックスによるH・ジェームズの柔軟性への言及はプラグマティズムとH・ジェームズの関係への注意を喚起するという意味で重要なものである。

更にホックスは、この手紙の中に表された「連続の概念」と、それを「信じて行動する意思」の表現が表れているとし、アダムズの「話すことは無駄だ」という態度に対し、「しかし、自分は話したいのだ」という意志を示し、望みを持つ好奇心の重要性を示唆しているのだと言う。

この過去・現在・未来の連続性についての認識と、未来に対して好奇心を持つという考え方は、プラグマティズム的な考え方の特徴として、ウィリアムの『プラグマティズム』や『多元論的世界 (A Pluralistic Universe)』には詳しい説明がなされている。¹⁸

アダムズの手紙の中にあるH・ジェームズの言葉 “Why mine yields an interest I don't know that I can tell you, but I don't challenge or quarrel with it — I encourage it with a ghastly grin. (「なぜ私の意識が興味を活発に啓発するのかと言うことについては説明できないが、それについて議論したり言い争ったりしないで、ただこれを大いに勧めたいと思う)」という部分も、ホックスから見るとプラグマティズム的なものと言えるのである。つまり、この手紙から容易に想像できるジェームズの文芸活動と個人的意識の関係は、自然なもので同一のものであるという考えの中に「意識と行動の一致」というプラグマティズムの概念を見ているのである。¹⁹ 筆者もホックスと同様にこの手紙の中にプラグマティズムの概念を見るものであり、特に「なぜ興味への意識が活発に働いているか理論化はできていないし論議するつもりもない」という文の中にプラグマティズムの体験重視の思想を見るものである。これは、文芸活動という行動と個人の意識の関係を「理論化できないが体験として感じている」と読み取ることが可能な文なのである。ウィリアムは著述の中で、felt experience という言葉をしばしば使っているが、ヘンリーも felt life という言葉をしばしば用いている。²⁰ ホックスは、このような行動重視や多元論的見方、あるいは新しい事実や偶然的な事を受け入れるH・ジェームズの態度の中に、伝統的合理主義者と区別されるものを発見しプラグマティズムと結び付けているのである。そして何よりも、ジェームズの手紙の中に見られる意識と興味の体験と、その先へ進もうとする連続性への予測を感じさせる生

き方をプラグマティズムの特徴と見ているのである。

ホックスはアダムズ的思考方とH・ジェームズ的思考方の比較について、どちらが正しいかという問いが、アダムズから出されたとすれば、あの有名な木の回りのリスの議論と同じく、その選択は、どちらの考え方が、より有効性があるかという問題に帰するとして、H・ジェームズの手紙に表されるプラグマティズムのその点に関する特徴をもその中に見ているのである。つまりプラグマティズムとはそうでなければ、長々と続く、形而上の議論を落ち着かせる「調停の役割」を果すものであるという理論をホックスはここにあてはめているのである。(58)

また、上に見た手紙や小説論のみならず、小説においても、プラグマティズムの特徴が反映していることをホックスは指摘する。そのひとつの例として、ジェームズ後期円熟期の作品『使者たち』の園遊会の場面を取り上げここにも、「調停の役割」の特徴と、「経験と意識と行動の連続性」が表れていると言うのである。

この場面はこの小説中様々な角度から、最もよく議論される有名な場面でもあり、本論の別の章でも扱ったものである。主人公ストレザーが、若い友人ピラムに向かって、「生きなさい。力の限り生きなさい。そうしない事は間違いだ」という場面でこの「生きよ」というセリフは、多くの批評家によって様々な意味で引用される場所である。この場面はまたレオン・エデルが評するように、19世紀中葉のダーウィニズムによる決定論に影響された科学的思考を含む、微妙な心理的傾向が表されているとも読めるものなのである。ストレザーの置かれた状況が錫の流し型に入れられたジェリーみたいに「条件つき」であることが表されているのはその一例でもある。

しかし、ホックスは条件つきの決定論的観点に立つエデルでさえ「それでもストレザーは希望を失っておらず、『力の限り生きたまえ』という積極的、行動的態度を取る」ことに気付いているとして次のように言う。「ストレザーの示すものが、どのような運命に置かれようと、人間は耳を持ち物事を聞きとり、目を持ち物事を見るべきであるという事をエデルも認めていたのだ」と。そして、更に「エデルは、H・ジェームズが哲学者でないことを言明しているにもかかわらず、その基盤には、『柔らかな (“tender-”)』心と『固い (“tough-”)』心とウィリアムが呼ぶ²¹『科学的』観点と『ロマンチック』な観点の間の調停的な役割を見据えている」というのである。(Hocks 62) 確かにストレザーは運命に条件付けられながらも、依然として見たり聞いたりする事は妨げられないし、その際の経験によって、更にその先に進む可能性を持つものとして描かれているのである。この物語で、ストレザーは自分の人生を嘆いているように見えるが、同時に実人生の中でたえず経験に目覚めている面も見せている。ここで注目すべき事は、ホックスが「調停的の役割」と見たストレザーの行為は同時にもうひとつのプラグマティズムの特徴である「経験と意識と行動の連動」をも示していることである。ストレザーの経験によって認識が変化していく過程というものは、彼の理想を求める考えと分離することがなく、しかも持続する意識とも切り離されることもない。このように見てくると、ウィリアムの哲学であるプラグマティズムの特徴がこの物語に示されているというホックスの説明には、説得力が認められるのである。

この物語には、また、ストレーザがピラムに向かって、「自分は人生の列車が、自分を待っていたのに気づかず、それを見逃してしまった」と述べる場面があり、また別の場面に、ストレーザは汽車に乗ることが出来、田舎に出掛けたのだが、そこでチャドとマダム・ド・ヴィオネの関係を発見してしまう場面に遭遇し、三人が気まずい思いで共に、列車で帰ってくる場面がある。これらの場面についてホックスは、二つの列車のイメージの使用はそれ自体、小説中で重要なものではないが、最初の列車は、「決定論」の中で起こるのであり、二つめの列車の出来事は、H・ジェームズのいう「運命」、あるいは「機会」によって起こるのであり、田舎へ出かけるという経験のベクトルの上に融合点をもつのだと言う。これは、ウィリアムが『プラグマティズム』の中で語る「真実は想念に起こるのであり、真実性とは出来事であり、その過程である」という叙述(77)がそのまま当てはまる小説の描き方だとホックスは見ているのである。「気付かず見逃してしまう」運命、あるいはそういう場に遭遇すること、そして「出かけよう」という「意志に伴って真実性という出来事が起こる」ように書かれたこの部分にはプラグマティズムの特徴が見られるというのである。

H・ジェームズの小説の終わり方とプラグマティズムの関係についても注目し値するものがある。ホックスは「H・ジェームズのほとんどの小説が閉じていないこと、つまり小説が終わった後、新しい展開を予想されるかのように開かれていること」がプラグマティズム的思考である開かれた系を示しているという。²² このことで読者に思い起こされる例は『ある婦人の肖像 (The Portrait of a Lady)』の結末である。この小説の最終場面で、なぜイザベルがローマに帰ったかについての論議は、従来研究者の間で活発に行われて来ているが、これは、その後イザベルはどんな生活をするかという問いに変わり得るものであり、その問いに対する答えには多くの可能性が存在しうるのである。実際この小説が映画化された際、そのような可能性のいくつかの例が示されたことがある。²³

『ある婦人の肖像』に限らず、『黄金の盃』や『使者たち』を始め、H・ジェームズの多くの小説の結末はその後の新しい展開を予測させる形で終わっていて、開かれた系を連想させるものである。

ところでこの開かれた系というものは未来に向かって前進するかなり積極的なイメージを想起させる。そして、プラグマティズムの道德論における根本は意識と行動の一致である。H・ジェームズ文学に描かれる人物の行動描写は、これまで見て来たところから見ても行動的で積極的なものが多い。この点からみると、先に見たマシーセンのH・ジェームズ「傍観者」説には疑問が生ずる。これまで見たように、アダムズの手紙に見るH・ジェームズの観点、あるいは『使者たち』に描かれるストレーザの態度、あるいはよく知られる『ある婦人の肖像』の主人公イザベルの行動等に表されるものは、かなり積極性があり、行動的で「傍観者」的態度とは程遠い。小説は手紙と違って必ずしも作者の価値観を表していないという考えも成立する。しかし、ジェームズ小説が語り手の目を通して語られる場合、その語り手は主人公達が表す以上の、あるいはそれ

と反対の意志を明確に表明したことはほとんどないという事実を考えあわせると、このイザベルやストレザーの態度は作者の価値観を反映していると考えてよいであろう。

それでは、先のマシーセンの「傍観者」説はどうなるのであろうか。筆者はこの「傍観者」説に全く根拠がないわけではないと考えるが、これはジェームズのごく一部の領域においてのみあてはまると考えている。つまり、例外と思われるのはキリスト教に関することと、公の社会活動についてであり、彼の作家としての活動にはあてはまらないと考えるのである。

H・ジェームズのキリスト教各宗派に対する信仰心に関しては、すでに言及したように、彼の父が自分の息子達の宗教教育に関して、特定の宗派に偏らないよう、ジェームズ兄弟を様々な宗派の教会に参加させたというのはよく知られているエピソードである。その結果、ジェームズ兄弟は宗教心を持っているにもかかわらず、特定のキリスト教宗派の信仰を信奉することはなかった。マシーセンの傍観者説はこれと関係があるのである。マシーセン自身はキリスト教信者であり、同時に社会主義者であった。彼は「意識の宗教」の中で、作者の傍観者態度を示す小説の実例を示していない。彼はジェームズが社会感覚を十分持たず、個人的な人間関係の感覚を保守したとのみ指摘する。研ぎ澄まされた社会感覚を有するマシーセン自身から見た場合、その意味でもジェームズは傍観者と写ったのであろう。彼の信念は、現代の責任ある知識人が政治と無関係でありうるはずがないというものであり、自分が社会主義であるのはキリスト教徒であるからであると考えてうたのだ。H・ジェームズが社会的政治的運動に参加しなかった事は、ジェームズとマシーセンとで大いに異なるところであるが、マシーセンとH・ジェームズの比較を、ヘンリーと兄との比較に適用する事は出来ないことであろう。²⁴ 兄が心理学と哲学の分野で行動主義を提唱したと同様、H・ジェームズは文学上の人物描写で行動主義を表したと言えるのであり、兄との比較で見ると、ジェームズは必ずしも傍観者ではなく、むしろ兄の同調者なのである。

H・ジェームズ文学が、過去・現在・未来という時間的連続性ばかりでなく、意識の連続性を信じ、また、宇宙は網の目のようなものか、鎖のようなもので形作られていて世界が連続しているという認識を持ち、抽象的概念や固定した原理、閉じ込められた体系を斥け、経験主義の立場に立ち、具体的なものや行動に向かう態度を保持し、事物間の統一と不統一の均衡がどうあるかを見届けるのを待つというプラグマティズムの特質を備えているというホックスの主張は、これまで見て来たように、マシーセンのプラグマティスト否定論よりはるかに多くの論証を示していると思われる。

ところで、プラグマティズムにおいて倫理学は論理学に依存するという考え方がパースにより明確にされたが、²⁵ このプラグマティズム論理学の源流にカントの道徳哲学が認められることは、ホックスを始め、後にみるピピンやアームストロング等のジェームズ研究者に度々言及されていることである。²⁶ そして、後に見るようにH・ジェームズの描いた人物たちの生き様には確かに理想を求めてそれに近づこうとする姿が多く書き込まれている。²⁷

しかし、ヘンリーとウィリアムが理念上で多くの共通項を持ちながら、実際のヘンリーの作品

批評に関しては、常に意見が一致していなかったという事実は、いくつかの資料で明らかである。²⁸ ヘンリーの方は、兄を称賛し、自分も長い間プラグマティズムの考え方を実践していたというのに対し、兄は弟の作品に批判的であった。しかし、これは発想を変えて見ると、兄が弟のプラグマティックな内容に気づけなかったということでもあり得るのである。

ウィリアムは、特にH・ジェームズの後期の文体に良い感情を持っていなかった。ウィリアム自身が、「古い哲学を新しい言葉で言い換える事」に自らの使命観を持ち、それまで限られた知識階級の言葉である哲学をやさしい言葉で語るという点で高く評価された哲学者であったためもあるが、彼自身は後の人々が認めるほどH・ジェームズ文学の中に表されたプラグマティズムの傾向に気づいていなかったのではないかと思わせる面が見られるのである。²⁹

ヘンリーの作品が完成する度に兄は丁寧な批評を弟に書き送っていたが、『黄金の盃』の文体を批評した時には、特にシャーロットと公爵に関する長々しい示唆的な言及はウィリアムの審美観から外れると述べ、自分と弟の理念と方法はいつもあべこべだと言い、「一度、黄昏時やかび臭いものをやめ、行動描写に生き生きとした活力と明確さを表し、会話では垣根を取り払い、心理学的言及を避け、絶対的な率直さを示した小説を私の名で出版してごらん」³⁰ と冗談交じりに述べている。これに対し弟は、兄の小説観はあまりにも大衆的であるとたしなめている。兄は弟の後期の文体を非難しながらも、この小説に描かれた社会が知的で、独特の雰囲気を持っている点を長所とし、公爵の部と公爵夫人の部を分けるなど、それまでの文学にない新しい形式を採用している点でこの本が成功していることを認めていた。

このように見てくると、ホックスのH・ジェームズ文学に対するプラグマティズム的解釈はプラグマティズムに対して無知であったなら決して気付くことのなかったと思われるジェームズ文学の様々な面を我々に認識させ、解き明かせて見せ、この点で、ジェームズ研究史上、大きな貢献を果たしている。しかし、筆者から見て、更に加えて欲しかったと望むところは、兄ウィリアムのプラグマティズムの宗教的倫理面における考察である。同じプラグマティストであっても、ウィリアムは、パースや、デューイ、ミード等と比して、宗教的倫理面が強いというのが定説である。³¹ パースの論理性の勝ったプラグマティズムや、学説の面では精密さを持つが人生観の面でジェームズに劣ると言われるデューイやミードとの比較に表されるW・ジェームズのこの特徴は、H・ジェームズ文学を考察する上で重要であると思われる。ホックスは、ヘンリーとウィリアムの関係を個人間の影響関係と見るよりは、二人が共有したこの時代の大きな思潮の中で生まれた哲学者と文学者の所産と見ており、その大部分は正しいといえる。しかし、ヘンリーとウィリアムの関係と、ヘンリーとパースの関係を考えてみれば明らかのように、ジェームズ兄弟が家族として共有した結果の影響関係には、無視できないものもある。³² この兄弟は年齢もわずか15カ月しか離れておらず、当時としては例外といえる外国旅行の体験を含む特殊で恵まれた幼少年時代を共有し、その時々善悪の判断に関する精神の問題意等、印象的な出来事は、ジェームズの晩年に著された伝記の中になお生き生きと写し出されている。このようなジェームズ文学に見

られる宗教的要素についての考察は別の機会に譲ることとし、ここではジェームズ文学における道徳と彼の兄ウィリアムの哲学との関係について最低限の範囲で、その根本的なところを取り上げて考察した。

Notes

1. 道徳感覚と芸術感覚の一致に関して述べられている小説論は次の箇所がその代表例である。
“The Art of Fiction” p.66. “Gabriele D'Annunzio” p.289.
“Gustave Flaubert” p.222, p.226.等
2. キリスト教文化とは、この場合、キリスト教の教えに基づいた社会から習得した生活の仕方の総称。社会における技術、学問、芸術、道徳等の様式が基本的にキリスト教の価値観に基づいていると見えるもの。(cf. *World Christian Encyclopedia*. Ed. D.B.Barrett. Nairobi:Oxford University Press, 1981.)ヘンリー・ジェームズの小説に関しては、純粋なピューリタンから派生した様々な宗派も描かれる。
3. ジェームズの父はその父（ジェームズの祖父）が熱心で厳格なキリスト教信者であった事に疑問を持ち、自ら様々な宗教的研究を行い、最終的にはスウェーデンボルグ派を信奉した。自分の息子達には特定の宗派に偏らない観点を身に付けさせる目的で様々な教会に参加させた事はよく知られている。(Cf. Leon Edel, *Henry James: The Untried Years*, pp.113-16.)
4. 「近代化」という語は多義的で問題のある語であるが、後にピピンの論文でも見るように、他に適当な語がないのでこれを使用することとする。ここでは19世紀後半の歴史的、社会的現象との関連で用いる。
5. この時代の文化を近年アメリカ・ヴィクトリアニズムと呼ぶ事も多くなり、H・ジェームズの道徳をこの面から論ずる下記の研究書が刊行された。これはヴィクトリアニズムの中でジェームズの道徳論を捉えており、基本的にピューリタニズムとのつながりで捉えている筆者とは観点を異にするものである。
Jessica Levine, *Delicate Pursuit: Discretion in Henry James and Edith Wharton*.
6. Matthiessen, *The James Family* p.343. あるいは Henry James, *Letters*, 2:83にも見られる。なおジョルダン氏とは、モリエール (Moliere) の『町人貴族 (*Le Bourgeois Gentilhomme*)』より取られた言葉。この中でジョルダン (M. Jourdain) 氏が知らず知らずのうちに言葉を学び身に付けていた様をジェームズが自分の体験の例えに引用したもの。
7. Leon Edel, *Henry James: The Master: 1901-1916* , p.298.
8. 本章に言及する Vivas, Matthiessen, R. B. Perry, J. W. Beach, Percy Lubbock の他、Robert L. Gale (cf. *A Henry James Encyclopedia*, pp.347-50.) 等多くの研究者が二人の兄弟の親近性と相互理解を認めている。
9. 二人は幼少より、共に海外生活を体験するなど、ほぼ同じ環境を共有し、互いの専門分野に

ついて議論できる環境にあった。また家族における人間関係もそれに類似したものがあり、H・ジェームズの人生後半までこの状態が維持された。二人の間で、あるいは家族の間で交わされた手紙には、この兄弟の関係が深い愛情で結ばれていた事を示すものが多い。cf. Henry James, *Henry James: Letters*. 4 vols. Ed. Leon Edel. Henry James, *The Letters*, 2 vols. Ed. Percy Lubbock.

10. R.B.ペリーはウィリアム・ジェームズが一方向的に弟の作品を批判したのに対し、弟はそれを称賛する他ないのが二人の兄弟関係であったと規定している。ドロシー・クルックは、H・ジェームズが哲学者でなく文学者であるところから、彼が兄の哲学からは影響を個人的に受けていないとしている。
11. ホックスはマシーセン、ペリー、ヴィヴァスの他 Henry Raleigh もプラグマティズムとジェームズの関係について誤った論を導く危険性があると指摘し、厳しい批判的態度を示している。(Hocks 29-30)
12. *Pragmatism*, p.18.
13. ヴィヴァスはH・ジェームズの作品『黄金の盃』に出てくるマギーとアダムの古い庭園を散歩する場面が、読者に更なる先の二章に読み進む流れを作っていると捉えた。そして、これはウィリアムが提唱した意識の流れに関する鳥の飛行 ('flights') と停止 ('perchings') の例に類似すると考えた。しかし、ホックスは小説は単なる鳥の飛行と停止に例えられる意識以上の複雑なプラグマティックの要素を含んでいると考えた。(Hocks 33) なおW・ジェームズの「飛行」と「停止」の概念の説明は、次ぎの箇所を参照されたい。William James, *Principles of Psychology*, pp.240-50. また、ヴィヴァスがウィリアム・ジェームズの道德観を洗練されたタブラ・ラーサ (ロックの認識論) と捉えていることにも、ホックスは批判的であり、ヴィヴァスの認識論に、イギリス経験主義論を否定するプラグマティズムの観点が捉えられていない事を指摘している。(Hocks 32)
14. Henry James, *The Letters of Henry James*, ed. Percy Lubbock, 2:360-61. ホックスとウィルキンソンが言及した箇所は次の通り。Hocks p.52. Wilkinson, p.153.
15. アダムズからH・ジェームズに宛てた手紙は紛失してしまっているが、その内容は同じ時期にアダムズからエリザベス・カメロン (Elizabeth Cameron) に宛てた手紙によって容易に推測できるのである。Henry Adams, *The Letters of Henry Adams* (1892-1918), 2:622.
16. *Pragmatism*, p.21, p.86, p.116.
17. ホックスは「小説の芸術」とアダムズの手紙に表れた共通点を主張すると共にその相違点をも指摘している。即ち、「小説の芸術」は、プラグマティズムの特徴である固定化した概念の排除を訴えているのに対し、手紙は個人的なものである故に、そのような考え方を個人的に表したに過ぎないと述べている。
18. *Pragmatism*, p.39, p.47, pp.86-87. *A Pluralistic Universe*, pp.325-26.

19. 現代から見るとこの同一化に、曖昧なものがないわけではない。特に後の現象論やポスト構造主義の理論にはこれに関して、更に再分化された議論もみられる。しかし、この同一化は同じ時代を共有するジェイムズ兄弟にあっては、同レベルの認識であったとするホックスに筆者も同意するものである。
20. この例は数え切れないが代表的なものは、ウィリアムの場合、*Pragmatism*, pp.14-15.に見られ、ヘンリーの場合は、*The Portrait of a Lady*, 3:iv-xに見られる。この中でH・ジェイムズは、「芸術作品の道徳的意義は『感じられた人生』にかかっている」と言う。
21. *Pragmatism*, p.4. THE TENDER-MINDED, THE TOUGH-MINDED.
22. ホックスは小説の終わりの閉じ方について Walter Pater の *The Renaissance* を例にあげ、小説の閉じ方と認識論的傾向と倫理観の相違について言及している。(Hocks, 66-67)
23. 1996年アメリカの雑誌がこの映画の出演女優やスタッフ数人にイザベルの未来について、語らせた記録がある。そこにはそれぞれ個性的な未来像が描き出されている。(cf. Interviews with Howard Feinstein in *Vanity Fair* in August 1995.)
24. ジェイムズが社会的政治的問題に関して活動的でないという批判は、マシーセン以外にも Lucien Goldmann, Fred Kaplan 等の研究者によってなされている。F. Kaplan はジェイムズが1895年のドレフュス事件において、ゾラに同情を示しながら、彼自身公的に何ら発言をしなかった事を指摘している。(Fred Kaplan, *Henry James, The Imagination of Genius*, p168.) またジェイムズが1915年、第一次大戦勃発に際し、慰問活動をした記録もあり、これらの公的行動をもって、彼の道徳的傍観者の態度を議論することは難しい事と思われる。
25. Charles S. Peirce, *Writings of Charles Sanders Peirce: A Chronological Edition*, vol.4, pp.190-92.
26. 「本論において、プラグマティズムを論ずる場合、H・ジェイムズ文学との関連により、主としてジェイムズのプラグマティズムを中心に扱う。微妙に違いのあるミードやパース等と、一応の区別をして扱う。」
27. ホックス、ピピン、アームストロングは一樣にH・ジェイムズ文学におけるカント的傾向を指摘する。これはカント哲学とプラグマティズムの関係より演繹されたものと思われる。しかし、H・ジェイムズとカントの直接的関係についてこれら三人は詳しく論じていない。また今迄のところ、この事に関して十分な研究が進んでいないと思われる。下記の著書はジェイムズと古典の関係を述べ、約二十人の作家に言及しているが、カントには言及していない。
Adeline R. Tintner, *The Book World of Henry James*.
28. 『鳩の翼』についての批判は Matthiessen, *The James Family*, p.338.
『アメリカの情景』については William James, *The Letters of William James*, 2:277-78.に見られる。
29. ウィリアム自身は新しい概念を次々と打ち立て、それは現代にも引用され、幾多の有名な格言を残している。しかし、H・ジェイムズに対する作品批評においては、次の文に示される

理由で、ウィリアム自身、H・ジェームズのプラグマティズムに気が付いていない実例である。「新しい観念は古い真理に最小限の修正を施ただけで、できる限り従来の慣れ親しんだ方法を保存しようとする属性を持っている。」「新しい真理とは常に調停者の役割をするもので、最小の動揺と最大の連続性を与えるように古い意見を新しい意見に合わせるものである。」(Pragmatism, pp.24-25.)

30. Matthiessen, *The James Family*, p.339.
31. cf. H.S.Thayer, *Pragmatism, the Classic Writings: Charles Sanders Peirce, William James, Clarence Irving Lewis, John Dewey, George Herbert Mead.*
32. パースも、大ジェームズの影響を受けてはいるが家族の影響と質を異にしていることは言うまでもない。一般に神の存在に関する問題は科学における問題と違って真理の実証は難しいとされているが、W・ジェームズは *The Will to Believe* (the New World, 1896), *The Right to Believe* (1910) の中で、信仰の条件が前もって満たされなくては、信仰される事実が到来しないという場合も人生にはあり得るという趣旨のことを述べている。この箇所は W・ジェームズの哲学中誤解を招きやすいところであるため何度も書き直されたと言われている。これは、『プラグマティズム』の真理観の説明で「真理は観念に起って来るのであり、それが真となる。真理の真理性は事実において、ひとつの出来事、ひとつの過程にある」と述べられていること (p. 77.) とも関係する典型的なプラグマティズムの考え方でもある。

Bibliography

1. Adams, Henry. *The Letters of Henry Adams*. Ed. Worthington Chauncey Ford. 2 vols. Boston and New York: Houghton Mifflin Co., 1938.
2. Armstrong, Paul B. *Henry James: The Phenomenology of Henry James*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1983.
3. Banta, Martha. *FAILURE & SUCCESS in America: A Literary Debate*. New Jersey: Princeton University Press, 1978.
4. Beach, Joseph Warren. *The Method of Henry James*. Philadelphia: Alfred Saifer, 1954.
5. Bell, Millicent. *Meaning in Henry James*. Massachusetts: Harvard University Press, 1991.
6. Dewey, John. *Reconstruction in Philosophy*. N.Y.: Dover Publications, INC.,2004.
7. Edel, Leon. *The Ambassadors*. Cambridge, Mass: Houghton Mifflin Co., 1960.
8. ----- *Henry James: The Master, 1901-1916*. Philadelphia and New York: J.B. Lippincott. Co., 1972.
9. ----- *The Life of Henry James*, 2 vols. Middlesex: Penguin Books Ltd., 1977.
10. ----- *Henry James: The Untried Years, 1843-1870*. London: Rupert Hart-Davis, 1953.
11. Fowler, Virginia C. *Henry James's American Girl: The Embroidery on the Canvas*. Wisconsin: The

- University of Wisconsin Press, 1984.
12. Gale, Robert L. *A Henry James Encyclopedia*. New York: Greenwood Press, 1989.
 13. Graham Green, 'The Portrait of a Lady' in *The Lost Childhood*. London: Eyre & Spottiswoode, 1951.
 14. Hocks, Richard A. *Henry James and Pragmatistic Thought*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1974.
 15. Hutchinson, Stuart. *HENRY JAMES: AN AMERICAN AS MODERNIST*. London: Vision and Barnes & Noble, 1982.
 16. James, Henry. *The American Scene*. Bloomington and London: Indiana University Press, 1968.
 17. ----. *The Europeans*. London: The Bodley Head, 1967.
 18. ----. *Henry James: Literary Criticism*. 2 vols. N.Y.: The Library of America, 1984.
 19. ----. *Henry James: Letters*. 4 vols. Edited, with introductions, by Leon Edel. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University, 1975-84.
 20. ----. *Henry James: Selected Literary Criticism*. Ed. Morris Shapira. Cambridge: Cambridge University Press, 1978. (see especially 8 "Art of Fiction", 9 "Emerson", 14 "George Sand", 18 "Honore de Balzac", 19 "Gustave Flaubert", 21 "Gabriele D'Annunzio".)
 21. ----. *The Letters of Henry James*. 2 vols. Edited, with introduction, by Percy Lubbock. New York: Charles Scribner's Sons, 1920.
 22. ----. *The Notebooks of Henry James*. Edited, with introduction, by F. O. Matthiessen and Kenneth B. Murdock. Chicago: University of Chicago, 1981.
 23. ----. *The Novels and Tales of Henry James* (the New York Edition). 26 vols. New York: Scribner's, 1907-17; rpt. 1961-7 (see especially Vol. 3 and 4 for *The Portrait of a Lady*; Vol. 10 for *The Spoils of Poynton*; Vol. 11 for *What Maisie Knew*; Vols. 19 and 20 for *The Wings of the Dove*; Vols. 21 and 22 for *The Ambassadors*; and Vols. 23 and 24 for *The Golden Bowl*)
 24. James, William. *A Pluralistic Universe*. New York: Longmans, Green, and Co., 1909.
 25. ----. *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking*. New York: Dover Publications, Inc., 1995.
 26. ----. *The Principles of Psychology*. 2 vols. New York: Henry Holt and Co., 1950.
 27. ----. *The Will to Believe and Other Essays in Popular Philosophy: Human Immortality*. N.Y.: Dover Publications, Inc., 1956.
 28. Kant, Immanuel. *Fundamental Principles of the Metaphysics of Morals*. New York: Great Books, 1987.
 29. Levin, Jessica. *Delicate Pursuit: Discretion in Henry James, and Edith Wharton*. New York: Routledge, 2002.

30. Lubbock, Percy. *The Craft of Fiction*. London: Jonathan Cape, 1954.
31. Markow—Totevy, Georges. *Henry James*. Translated by J. Griffiths. London: The Merlin Press, 1969.
32. Matthiessen, F.O. *Henry James: The Major Phase*. New York: Oxford University Press, 1944.
33. Murray, David. *Pragmatism: Library of American Thought*. Chicago: University of Chicago, 2003.
34. Pater, Walter Horatio. *The Renaissance: Studies in Art and Poetry*. New York: Lightning Source, Inc., 2000.
35. Pippin, Robert B. *Henry James & Modern Moral Life*. Cambridge: Cambridge University Press, 2000.
36. Poirier, Richard. *The Comic Sense of Henry James: A Study of the Early Novels*. London: Chatto & Windus, 1960.
37. Putt, Gorley S. *Henry James: A Reader's Guide*. Ithaca, N.Y. : Cornell University Press, 1967.
38. Rorty, Richard. *Consequence of Pragmatism*. Minnesota: The University of Minnesota, 1982.
39. Rosenthal, Sandra B. and Bourgeois, Patrick. *Pragmatism and Phenomenology: A Philosophic Encounter*. New York: John Benjamin Pub. Co., 1990.
40. Rowe, John Carlos, *Henry Adams and Henry James: The Emergence of a Modern Consciousness*. Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1976.
41. Sartre, Jean-Paul. *Being and Nothingness: A Phenomenological Essay on Ontology*. trans. Hazel E. Barnes. New York: Washington Square Press, 1993.
42. Sasmor, James C. *Perception May Be Reality*. N.Y.:Trafford Publications, INC., 2001.
43. Seymour, Miranda. *Henry James and his literary circle: A Ring of Conspirators*, London: Hodder & Stoughton, 1988.
44. Tanner, Tony. *The Writer and His Work: Henry James*. Amherst: The University of Massachusetts Press, 1985.
45. Thayer, H. Standish. *The Pragmatism, the Classic Writings: Charles Sanders Peirce, William James, Clarence Irving Lewis, John Dewey, George Herbert Mead*. New York: Hachett Pub. Co., 1982.
46. Tintner, Adeline R. *The Book World of Henry James: Appropriating the Classics*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1987.
47. Wellek, Rene and Warren Austin. *Theory of Literature*. N.Y.:A Harvest Book, 1970.
48. Wilkinson, Myler. "Henry James and Ethical Moment" *The Henry James Review* vol.11 no. 3. Fall, (1990): 153-76.
49. Williams, Merle A. *HENRY JAMES AND THE PHILOSOPHICAL NOVEL: Being and Seeing*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993.

50. モリエール (Moliere) 『町人貴族 (*Le Bourgeois Gentilhomme*)』鈴木力衛訳 東京：岩波文庫、1970.

(2004年 9月25日受理)